

アイリス・マードックと「現代」

岡 本 靖 正

一

「ジャンリポール・サルトルを理解することは、現代の何か重要なことを理解することである。哲学者として、政治家として、そして小説家として、サルトルは深く現代的であり、かつそれを自覚している。彼は時代のスタイルを持っている。彼の広範な活動を眺めると、このスタイルがヨーロッパの倫理思想、形而上思想、政治思想の伝統から自然に生成してきたものであることが明らかになる。……彼はマルクス主義、実存主義、現象学というヘーゲル以後の三つの思想運動の道筋の真中に立っている思想家である。」

アイリス・マードックはその『サルトル——ロマンテ

ィックな合理主義者』(一九五三)をこのように書き出しているが、サルトルを最初の著作の対象として選び、サルトルの現代性とその自覚を鋭く指摘するこうしたことは、また同時にマードック自身の「現代」への深い自覚的な関心をも明瞭に示している。彼女はサルトル論を出した翌一九五四年に処女小説『網の下』で文壇に登場し、相前後して処女作を発表したジョン・ウェイン(『急いで降りろ』、五三)やキングズレー・エイミス(『ラッキー・ジム』、五四)等とともに戦後イギリス小説の新しい世代の誕生を鮮やかに印象づけたが、そうした世代の中でマードックの時代意識は際立って自覚的であった。それは、周知のとおり、彼女が長くオックスフォードで哲学を講じ、創作活動と平行して、持続的に哲

学的著述活動が続けてきたことと関係がある。

マードックはオックスフォードのサマーヴィル・コレッジで古典学を専攻し、古典語と哲学と古代史を学んだ。マードックのことはによると、イギリスで哲学を勉強するにはオックスフォードのこのコースが一番よいのだという。ここではプラトンやアリストテレスを読み、伝統的な哲学を勉強した。在学中に第二次大戦となり、卒業後一時、戦時文官として大蔵省に勤めたあと、国連救済復興機関に入って、戦争直後ベルギーとオーストリアで難民救済の仕事にあたった。折から、ベルギーやフランスにいた彼女の友人たちはみな実存主義に夢中になっていて、彼女もその洗礼を受け、実際にサルトルにも会った。もう一度本格的に哲学をやってみようと決心したのはその頃であった、とマードックはみずから語っている。やがて彼女は、奨学金を得てケンブリッジのニューナム・コレッジであらためて哲学を学んだ。ケンブリッジ大学哲学教授ヴィットゲンシュタインの最終講義が行なわれたのは一九四七年の春学期であったが、マードックがケンブリッジへ行ったのはその前後であったはずで、彼女がそこで接したのはヴィットゲンシュタインの独特

の思想と言語分析哲学である。マードックの最初の小説『網の下』の網のイメージがヴィットゲンシュタインの『論理哲学論考』六・三四一に由来するものであることは、いまではよく知られている。

こうしてマードックは、このあとオックスフォード、セント・アンズ・コレッジの研究員となって道徳哲学を講ずることになるのだが、非常に興味深いことに、その後の歩みを見ると、マードックの出発点は戦後彼女が接したサルトル、ヴィットゲンシュタイン、言語分析哲学という極めて現代的な哲学の限界の認識にあり、そこから次第にプラトンに接近してゆくという道行きを辿っている。いま、ほとんど不要とも言いうるマードックの哲学的経歴を簡単に記してみたのも、この点をあらかじめはっきり指摘しておきたかったからであり、彼女の「現代」への独特のかかわり方も、まさにこの一見逆行的な道行きの中にあるのである。

二

『サルトル——ロマンティックな合理主義者』という著作の性格を簡単に規定することはむずかしい。「事物

の発見」、「自由の迷路」、「言語の病い」……といった章題だけ見ると、いかにもサルトルの哲学の研究のようであり、当然『存在と無』その他の哲学的著作の分析もある。しかし最も多く分析されているのはむしろ小説(『嘔吐』と『自由への道』)であり、サルトルが小説の中で人間をどのように描いているかということである。

たとえば『嘔吐』を分析してマードックは次のように論じている。「ロカンタンの問題は通常の人間の問題ではない。彼は癒し難い形而上学的気質の持ち主で、人間関係を全く持たずに生きている。だがしかし、サルトルがここで提示しようとする意図しているのは、人間的状况一般のイメージだと思う。彼が疑いもなく現に提示するのに成功しているのは何かと言えば、それは彼の思想の構造である。『嘔吐』はサルトルの哲学的神話である。」

『自由への道』についてもマードックは、サルトルが「人間関係の彼方を見て」いて、「人間がお互いに理解し合おうと泥まみれの努力をして挫折することによりあまり価値を置いていないようである」と指摘する。そして最終章の次のような結論的なことばを読めば、マードック

のサルトル論の少なくとも一つの中心的な問題がはっきりするだろう。

「サルトルは、本来の小説家にとっては致命的なことであるが、人間生活を作り上げているものに我慢がならない。彼は、一方で現代生活の細部に生き生きとした、しばしばいささか病的なまでの興味を抱いており、もう一方で、それを分析し、知性を満足させる図式やパターンを組み立てようとする情熱的な願望を持っている。しかし、これら二つの才能を融合させて大小説家の作品たらしめ得る特徴が欠けている。すなわち、人間および人間の相互関係は不条理で還元不可能なユニークなものである」ということの理解である。」

これは、基本的には、サルトルの小説に加えられた批評として読むのが正しいだろう。そしてこれに反論することもむずかしくはない。小説家の描く人間が個別的でユニークな人間であるとすれば、哲学者の考える人間というものは何らかの意味でかならず抽象化され、一般化された人間であって、マードックのメンタリティはそれだけ小説家的であり、サルトルのそれは哲学者的なのだ、とこのことから結論することもできる。あるいはこうし

た考え方は、それ自体極めてアングロ・サクソンの考え方にすぎないと言ってもよい。さらに言えば、『嘔吐』がサルトルの哲学的神話であるというのが正しいとして、人間的状況一般を神話的な構図によって表現したものを本来の小説と認めるか否かは、単に好みの問題にすぎない、とひらき直ることもできるだろう。

しかしマードックはこのとき、最も代表的な現代人であるサルトルに現代の一つの徴候を見ているのであって、一見単なる小説批評のように見える先程の引用も、小説批評であると同時に、実はやはり現代思想そのものを問題にしているのである。すなわち、現代小説においては、サルトルに限らず、本来の小説家の描く人間もまた個別的でユニークな人間ではなくなってきたおり、それは現代の人間観（その一つがサルトルの実存主義的人間観）にある種の重大な欠如があることを意味してはいないかということである。この点は、一九五九年の『イエール・レビュー』（第四九巻第二号）に書いた「崇高と美再訪」やその翌年『エンカウンター』一月号に寄せた「乾燥性に反対する」といった論文でさらに尖鋭に主張される。

三

「崇高と美再訪」の意図は、「一つの文学的問題をより一般的な政治的・道徳的問題と結びつけてみる……大ざっぱに言えば、自由民主主義の人間の理論は適切であるかという問いと、最も偉大な文学作品の特徴は何かという問いとを結びつけてみる……もつと正確に言うなら、小説中の人物の描き方における最近の変化をより一般的な意識の変化の徴候として論じてみる」とであった。「乾燥性に反対する」は同じ問題をもつと一般的かつ論争的に論じていて、マードックは、これらの論文ではサルトル論の場合よりもっとはっきり現代の人間観の欠陥を指摘している。

マードックによると、現代イギリス哲学の人間観は「唯物論的行動主義が、孤独な意志としての劇的人間観と結びついたところに成立する」（「乾燥性に反対する」）。言語分析哲学の概念分析は日常言語において存在する「公的概念」を前提としているが、公的概念は公然と外に現われた行動に基づいてのみ組み立てられるものであるから、精神の内的行為（内面生活）は、何らかの形

で外的行動として現われないかぎり、存在しないに等しく、「道徳的に言えば、人間はその観察可能な行為である」(「崇高と美再訪」ということになる。この言語分析哲学の行動主義がヒューム以来の唯物的世界観に修正を加え、それがカント流の孤独な意志としての人間観と結びついたところに成立するのが、現代イギリス哲学の人間観だとマードックは見るわけである。彼女はその一つの典型をスチュアート・ハンブシャーの『思考と行動』に見出している。この見方によると、「人間は、最も普通の法廷常識の意味で自己意識の度合いが様々であり得るということを別にすれば、理性的で、全く自由である。人間は道徳的に言えば自分の眺める一切のものの独裁的統治者であり、自己の行動の全責任を持つ。人間を超越するいかなるものも存在しない。彼の道徳言語が彼の実践の指針であり、選択の道具であり、好みの指標である。彼の内面生活は行為と信念とに解消される。信念の存在は外に現われてはじめて確かめられるものであるから、ここでいう信念も外的行為を指す。彼の道徳的議論は決断に支えられた経験的事実への言及であり、彼の必要とする道徳のことばはただ一つ、〈善い〉

(あるいは〈正しい〉)という決断を表現することばだけである」(「乾燥性に反対する」)。

サルトルの人間観も、他のあらゆる相違にもかかわらず、本質的には同じだとマードックは言う。「サルトルはヘーゲルに負うところが多いにもかかわらず、この人間観がはなはだしくカント的であるのはおもしろい。ここでもまた、個人は孤独で全く自由なものとして考えられている。いかなる超越的現実も存在せず、自由の度合いというものもない。一方に膨大な量の心理的欲望と社会的習慣と偏見とがあり、もう一方に意志がある。むしろ、魂の内部で、よりヘーゲルの性格のある劇が演じられる。しかし、意志の孤立は依然として残っている」(同論文)。

一九五九年には、マードックはもう一つ「理論の家」(『パーティザン・レビュー』冬季号)という論文を書いていいる。これは、福祉国家の実現によってその目標が一応達成されたこの時点で、英国の社会主義運動がエネルギーの喪失に苦しんでいることを憂え、それを理論の貧困によるものとして、左派が理論を提出すべき任務を担っていることを指摘したものである。しかし、魅力あ

るヴィジョンや理論の貧困は、単に左派の怠慢によるのではなく、それをもたらした原因は、現代思想そのものに根ざすものだ。マードックは見ている。すなわち、言語分析哲学および実存哲学の行動主義的人間観によって「内面生活」というものが軽視され、事実上否定されて、行為主体（意志）と行動との間に「概念の中間領域」が欠落し、想像力による認識あるいは理論や概念を創造する内的思考が貧困化したためだと言うのである。その結果、現代社会は政治的・道徳的語彙を喪失して、「われわれの政治的・道徳的問題についての思考に深刻な空洞が生じ、それが次第に拡がりつつある。この空洞に現在社会全体が不安をおぼえており、しかもわれわれはおそらく歴史上はじめて、慰めと指導原理としての宗教の喪失を痛感しているがゆえに、この空洞がいっそう大きな苦悩となっている」（『理論の家』）。

これは『網の下』の一人称の主人公ジェイク・ドナヒューの書いた哲学風の対話『沈黙させるもの』の一節を想起させる。独特の沈黙の哲学を有するアナンダインはそこで次のように言っている。「ぼくの言っているのは、われわれがそれを経験しているときの真の決断の

ことだ。そしてこのことでは理論と一般化から離れることは真実に近づくことだ。あらゆる理論化は逃走だ。われわれは状況そのものの支配に身を委ねねばならない。そしてこの状況というものは、ことばでは表現できない個別的なものだ。実際それは、いわば網の下を這うようにいくらわれわれが努力してみたところで、十分に到達しえないものだ。」（『状況』）はもっと一般的には「現実」と置きかえてよいであろうが、この考え方の背後にあるのが『論理哲学論考』のヴィットゲンシュタインの思想であるのは明らかである。そしてマードックはこの考え方の意味深さを十分承知した上で、なおかつ「ことば」と「理論」の必要を説くのである。

マードックのしている問題はもはや明白であろう。一方において、現代は現に政治的・道徳的現実を前にして、それを理解する手がかりを失っているという事実がある。これは、「現実」というものを哲学がいかに基礎づけるにしても、ともかくわれわれは自己を超えたもの——「超越的現実（他者）」——に直面していることを示す以外の何ものでもない。ところが「われわれはもはや人間を超越した諸々の価値、諸現実を背景にして人間を見

るということをしてしない。われわれの描いている人間像は、簡単にとらえられる経験的世界にとりかこまれた勇敢で裸の意志としての人間である。真理という厳しい理念のかわりに、われわれは誠実というくみしややすい理念を置きかえてしまった」(「乾燥性に反対する」)。

こうした状況は文学に正確に反映されている。「二十世紀小説は、通例、水晶的であるかジャーナリスティックであるかのいずれかである。すなわち、それは十九世紀的意味での「人^{キャラクター}物^{オブジェクト}たち」を含まない、人間の条件を描いた寓話風の小さな物^{オブジェクト}であるか、さもなければドキュメンタリー風の無定形の大きな物^{オブジェクト}である」(同論文)。この二種のうちでは「水晶的小説」の方がすぐれていて、純文学の作家が書こうとしているものであることをマードックは認めているが、その典型がサルトルの『嘔吐』であることは明らかで、彼女がこの論文で反対している当のもののこそ、その「水晶性」にほかならない。マードックによると、それは象徴主義の「乾燥性」(小ささ、明晰さ、自立性)の理想を想い起こさせるが、象徴主義(衰退したロマン主義)が理想とした純粹で、清潔で、自立的な「象徴」は、ロマン主義の人間観

によって情緒と欲望の混濁した部分を切り捨てて考えられた「孤独な人間」の類比物である。そして、その象徴主義の理想がその本来の家である詩から他の領域へ侵入したことが散文の衰退をもたらす一因となったとマードックは見る。つまり、その結果、小説は水晶的——現実の不条理な偶然性から透明な形式(神話的構図)の必然性への飛躍——となって現実から遊離するか、さもなければ、散文に現実との接触を回復しようとして「詩は言語による疑似^{オラジエクト}物」の創造であり、散文は説明と解説のためのものである」という主張(サルトルの言語論)が行なわれ、散文の「想像的機能」が無視されて、かえって小説をジャーナリスティック小説へと墮落させる。それは文体を持たず、もはや小説(「書かれたもの」)であることをやめる。現代小説におけるこの「形式についての困難」はまさに、政治・道徳の領域で現実をとらえるすべを失っている現代社会のデイレンマと正確に照応しているのだ、というのがマードックの指摘である。

四

ところで、「最も偉大な文学作品の特徴は何か」とい

う「崇高と美再訪」の問いは、実はすでに『サルトル』において答えられている。すなわち「人間および人間の相互関係は不条理で還元不可能なユニークなものである」ということの理解、言いかえれば、われわれは一人一人が不条理で還元不可能な、したがって自分自身にとつてすら不透明なものであり、しかもそういう全く別個のエクセントリックでユニークな他人が存在するということの理解にほかならない。さらに言うなら、「最も偉大な小説家を見分ける特徴は、その他者意識の質にある」(「崇高と美再訪」)。そして、作家が自分の作品世界に自分とは全く異った人物(他人)を住まわせることを許容する他者意識の質とは、「理性ではなく、寛容ですらなく、愛である」(同論文)。

マードックがこうした人間観を彼女の道徳哲学の中でどのように位置づけているかを明らかにするには、少なくとも彼女が「崇高と美再訪」で要約してみせたカントの道徳哲学とヘーゲルのそれを背景に置く必要がある。彼女によると「カントの道徳哲学を支えているのは徳と自由と理性という等式である。徳は何かを認識することではない。それはむしろ理性的秩序を課す能力である。

われわれは他人を、個別的でエクセントリックな現象的人間としてではなく、同等に普遍的理性を持った人間として尊敬する。もっとも、われわれは物質的対象を認識すると同じようには自分自身あるいは他人において理性を認識できないということはある(そしてこれはカントの不可知論である)。われわれは純粹に理性的ではないから自分自身にとつても透明ではない。」しかしカントにとつて情緒と欲望は倫理とは無関係であり、「われわれは情緒と欲望の混沌とした曖昧な領域から選択と行為の疑問の余地なき明晰へと向う。」これが現代のロマン主義的な行動主義的人間観の源流である。

一方、現実を歴史的・心理的概念の領域(理性的自己意識)の拡大と見たヘーゲルにとっては、理性は「知の円環を閉じる力を持ったもの」であり、現実を完全に知りつくすことが可能である。「ヘーゲルの宇宙には唯一の存在者、すなわち、自己の外側にいかなるものをも許さず、他者とみえる一切のものを認識しようと苦闘する全体しか存在しない。」カントにとつて徳は認識の問題ではなかったが、ヘーゲルは「進歩が自己意識の増大を尺度に測られるという意味で認識の観点から徳を考えた。

徳はまた必然の過程の認識という意味で自由でもあった。すなわち自己認識としての自由である。」そこで、カントの道德哲学の根本が「徳 $\equiv$ 自由 $\equiv$ 理性的秩序」という等式であるとすれば、ヘーゲルのそれは「徳 $\equiv$ 自由 $\equiv$ 自己認識」という等式である。

以上のことを背景としてマードック自身の道德哲学の構造を考えれば、それはだいたい次のようになるであろう。

カントは理性を超えたものを認めないわけではない。しかし彼の道德哲学は情緒と欲望の混沌とした領域を切り捨てることによって成立し、そこでは、人間は全く理性的で透明になり、理性は何一つ自己の理解を超えたものを見出すことなく、その透明な世界に君臨する。したがって、ここでは認識は問題にならない。そして理性は道德意志であるから、人間は全く自由である。また、カントは他人を排除しないが、彼の尊敬する他人はエクセントリックな個人としての他人ではなく、同等に普遍的理性を持った人間としての他人である。それは、いわば普遍的理性を中心点とするコンセントリック（同心円的）な同質の他人であり、事実上他者は存在しない。し

かし、現実の現象的な人間は情緒と欲望の混沌から逃れることはありえず、したがって全く理性的ではないとすれば、実践理性は不透明な世界に立たされていることになり、もはや人間は全く自由ではない。言い換えれば、理性は自己を超えたもの（他者）にとりかこまれていくわけであり、ここでは、理性が自由を獲得するためには、何よりもまず他者の認識が問題となってくる。さらに、マードックにとっては、エクセントリックな他人の存在は、自己内部の他者にもまして、いっそう深い闇として理性の前に立ちふさがる。したがって、マードックがカントとヘーゲルの道德哲学の構造を示す等式を立てた流儀にならえば、マードックのそれは、自己の内部と外部の他者を含めて、「徳 $\equiv$ 自由 $\equiv$ 他者認識」ということになるであろう。

ヘーゲルの哲学は他者の存在を許さないところに成立する。一切は究極的には理性的自己意識の中にとりこまれ、知の円環は閉じられる。しかしマードックにとって、他者については完全に与えられないことはなく、知の円環は永遠に閉じられず、認識の地平は無限に後退してゆく。これは、他者（超越的現実）の認識の度合いに応

じて自由を獲得するということである。したがって、ここには「自由の度合い」というものが存在することになる。同時にここには進歩の観念と完全の理念が確保される。

超越的現実が不条理で不透明な闇だとすれば、それを認識するのに重要になってくるのは想像力である。想像活動はわれわれが何かを理解しようとするとき、日常最も多く行なっている活動でもある。マードックが一九六六年六月号の『エンカウンター』でスチュアート・ハンブシャーの『個人の自由』を批評したとき（「実践理性の闇」、その批判の中心は、ハンブシャーが想像力を軽んじたことにあった。想像力はつねに「幻想（悪しき想像力）」に堕す危険性をはらんでおり、実際、われわれはあらゆる種類の幻想にとらわれていて、現実（他者）を認識すること（自由）が困難になるが、しかし現実を認識することを可能にするのもまたほかならぬ想像力である。作家がその想像力によってその作品世界に作者自身とは全く別個の人物（他人）を、しかも多数、生き生きと描き得ているとすれば、それは他人を理解し得ていることにほかならない。その意味で、最もすぐれた作家

は最も自由（徳）である。「芸術家は、実際、善なる人の類比物であり、特別な意味で善なる人、つまり、自己をむなしくし、自己を通して他者を存在させしめる愛の人である」（「崇高と美再訪」）。かくして、マードックにとって、シェイクスピアは最も自由であり、最大の愛の人だということになる。

想像活動も愛も「内面生活」に属するが、「認識」を徳と考えるマードックの人間観において「内面生活」は復権し、根拠づけられる。一九六四年の『イエール・レビュー』（第五三巻第三号）に書いた長論文「完全の理念」で、マードックは愛を道徳哲学の中心だとして行動主義哲学を批判し、行動主義哲学が強調する「選択」はすでに「認識」の地平によって限界づけられており、認識への最も重要な努力である「注意」（忍耐強い愛の行使）によって認識が十分行なわれているときには、すでに選択は終わっていて、もはや「意志は決断ではなくて服従」（「注意」とともにシモヌ・ヴェーユの言葉）として感じられると主張している。一九七〇年にマードックは、この「完全の理念」とレズリー・ステイヴァン講義「他の諸概念に対する善の至高性」ともう一篇「〈神〉

と「善」について」という論文を一冊にまとめて、『善の至高性』を出した。彼女が愛を中心とする「善の哲学」へ向う道筋は、以上のことからよく納得されるであらう。

五

マードックの小説は『網の下』以来『黒衣の王子』(七三)まで十五編にのぼる。彼女の一贯したテーマは愛であり、愛をめぐる様々な人間関係であったと言つてよい。そのなかで、マードックのとらえている現代の人間的情況、あるいは「現代」という時代そのものを最も端的に示しているのは、第十作の『天使たちの時代』(六六)であらう。これはまたマードックの最もあらわに哲学的な小説でもある。

空襲で教会堂は爆破され、わずかに、崩れかけたクリストファー・レンの尖塔と牧師館だけが残っているロンドンのある教会に新しく赴任してきた牧師キャレル・フイッシャーは、その奇行によって狂気を噂され、信仰を失っているのではないかととりざたされている。深く暗い霧に閉ざされた牧師館には、ほかに彼の娘ミュアリエ

ルと姪のエリザベス、ジャマイカ系の黒人の女中パティ、前任者のときから門番として牧師館にいるロシア人移民の父子ユージン・ベシユコフと問題児のレオがいる。キャレルの弟マールカスやその友人ノーラ・シャドックスIIブラウン、教区委員会からアンシア・パロウがキャレルと接触を求めるが、闇の奥にひきこもつて黒い僧衣に身を包んだこの牧師は、外界と一切交渉を絶っている。

しかしこの少数の人間たちの間にもいろいろ複雑な人間関係がある。キャレルは妻の生前からパティと情交があり、それを知っているミュアリエルはパティを憎んでおり、パティもミュアリエルに敵意を持っている。パティはやがて、三位一体を象徴する三人の天使を描いた聖画を大切にしているユージンを愛するようになり、ユージンもパティに愛情を寄せるが、ミュアリエルもまたユージンに心を惹かれる。ユージン自身も過去の深い精神的傷を負っており、父と子の難しい関係もある。

牧師館の奥まった一室に病弱の美少女エリザベスがいることをレオは知らないが、ある日ミュアリエルはレオにエリザベスの姿をかいま見させようとして壁の裂け目からのぞく。彼女がそこに見たのはキャレルとエリザベ

スのからまった姿である。さらに他の一件でユージンとの間をミューリエルに邪魔されたパティは、その憎悪にまかせて、キャレルがかつてエリザベスは姪ではなくて、死んだ（それも自殺であったことがわかる）末の弟ジュリアンの妻との間に生まれた自分の娘であると語ったことを、ミューリエルにぶちまける。キャレルは睡眠薬を飲んで自殺するが、ちょうどどきどきの事件のときに、ようやく牧師館に入ることができたマークスにキャレルは神の死について次のように語る。

「もしも善が存在するのなら、それは一なるものでなければならぬ。多なるものは邪教だと言うのではない。それは悪、というかこれまで悪と呼ばれてきたが、いまや名称がなくなったものの勝利なのだ。……が、神の消失は、単に、その結果そこに人間の理性が自由に入りこめる真空が生じたといったものではない。神の死は天使たちを解き放ったのだ。彼らは恐ろしい。……権天使もいれば能天使もある。天使たちは神の想念なのだ。いまや神はその諸々の想念へと分解してしまった。それらは、その本質も多様性も力も、われわれの思惟ではとらえられない。神は、少なくとも、われわれが善と考える何も

のかの名称だった。だがいまやその名称すら失われ、精神の世界は飛散し去った。もはや多数の精霊の磁性を阻むものは何もない。」

「おれは何度、説教壇から、神は存在しないと公言したい誘惑にかられたか、お前にはわかるまい。そうはっきり口に出して言えば、それほど宗教的なことばはほかに考えられない」と言うキャレルに、マークスが「そんなことは必ずしも新しくはない——」と言いかけると、キャレルはさらに「そうだと。いろんな人が何度もそのことばを口にしてきた。しかし、そのことばを信じたものは誰もいないのだ。おそらくニーチェがほんの一時期信じただろう。ただ、彼の芸術家としてのエゴイズムがすぐに真実を曖昧にしてしまった。それを信じつつけることができなかったのだ。おそらく気が狂ったのもそのためだ。その真実そのもののためではなく、それを心の中に抱きつづけそこなったためだ」と答えている。

神の死による「天使たちの時代」という比喩は、マードックのとらえている現代の人間的生活の基本的構図を示すものである。神の死という問題自体は、キャレルが答えているように新しくはない。しかし、それを神が存

在しなければ一切が許されているという形でとらえ、空位となった神の座に個人としての人間を据えて、その人間を自己の一切の行動に全責任をもつ、全く自由で孤独な意志(理性)とみなすサルトルや言語分析哲学の人間観がここで否定されているのは、もはや明白であろう。

作中で最も堅固な常識をもったノーラは、キャレルのいう「天使たち」を「無責任な心理的諸力」と解している。キャレルも「われわれは偶然の創造物で、われわれには理解できない諸々の力にあやつられている」と語っている。すなわち、「天使たちの時代」とは、神といふ一なる強力な磁極によってその磁場に繋ぎとめられていた諸々の心理的な力が、その磁極を失って四散し、それぞれ勝手に独自の磁性を主張しはじめた時代で、人間の精神は内部に幾重にも渦まき混沌とした磁気嵐(認識の闇)の中で、自己の方位を見定めることが困難になり、ましてや、外部の磁極を失って自閉するこの個々人の精神が他者を正しく認識することはいよいよ困難になった時代である。

マードックの哲学において他者認識が重大とされるのもそのためであり、彼女の小説において、多く、各章を

特定の人物にふり当てて、全体として複数の視点的処理の方法がとられるのも、自己および人物相互の認識の度合いとずれとを示すための方法だと言ってよい。そして、彼女のプロットにおいて、アリストテレス流のアナグノリシス(認識・発見)がつねに現われてくるのもこのためなのだ。

また一方、彼女の小説でくり返し複雑でグロテスクな人間関係が描かれ、さながらバックの媚薬に踊らされる「夏の夜の夢」の様相を帯びてくるのも、まさにこの人間たちが「天使たちの時代」の人間模様を生きているからなのだが、その中で最も大きな力をもった天使、最も大きな心理的な力は、神の如き強大な他者、大きな必然性(秩序と意味)によって支配されたいという欲求である。こうして『網の下』のヒューゴー、『魅惑者からの逃走』(五五)のミッシェ・フォックス以来マードックの小説にはくり返し魅惑者が登場してくる。キャレルもその一人で、彼に対してマーカス、ミューリエル、パティが抱いている「恐れ」の感情の一部には、キャレルをいわば疑似神として見ている感情がある。

キャレルの一連の破戒的行為、ことにその近親相姦は、

「瀆神の可能性」への逆説的希いをこめた彼の最も宗教的な行為であろう。しかし実際には、それは瀆神の不可能（神の死）の悪魔的証明にはかならない。しかし、当然信仰もなく、素人哲学者で『神なき時代の道徳』という本を書きかけているマードックですが、自分の兄には神を信じていてもらいたいという願望がある。現代の人間は神の死を口にしながら、実際にはキリスト教的な道徳の名残りの中で、あるいはノーラのことばで言えば、「神々のたそがれ」の中で生きている。現代を真に生きるためには、神の死と天使たちの時代の恐ろしさを認

識し、疑似神の疑似性を見する必要がある。ミューアリエルが、まだ助かるかもしれないキャレルをそのまま死なせることの意味には、このことが含まれているかもしれない。そしてはじめて彼女は父を一人の人間として見て、愛情を感じるのである。キャレルが自殺して牧師館の住人たちが散り散りに去って行くとき、ようやく長い霧の季節が終って陽の差しはじめた中で、ただ一つ崩れかけて残っていたレンの尖塔の解体作業がはじまっている。

（二橋大学講師）